

30周年の東京ディズニーリゾートは、13年度に過去最高だった前年を更に1割以上も上回る3,129万人を集客。ベイエリアの多くのホテルでは、同リゾート客の宿泊で稼働率は大きく上昇。

1983年の開園から30年が経過した東京ディズニーリゾート（以下「TDR」という）は、2013年度の1年間にわたり「30周年 ザ・ハピネス・イヤー」を開催した。昼のパレード「ハピネス・イズ・ヒア」の新規導入などの30周年イベントを行い、マスコミで取り上げられる機会が増えたことに加え、景況感の回復に伴うレジャー需要の高まりもあり、連日多くの来場者でにぎわった。

13年度合計の入園者数は、3,129万人に達した（株）オリエンタルランドが4/1発表した速報値）。12年度は、11年3月に発生した東日本大震災の影響で営業日数の減少を余儀なくされた11年度の反動もあって既往ピークとなったが（2,750万人、前年度比+8.5%）、13年度は増加率でも飛躍的にこれを上回り（同+13.8%）、最高値を更新した。

（株）オリエンタルランドの公表資料によると、関東圏以外からの来園者の比率は32.5%となっている。13年度の入園者数は前年度を約380万人上回っており、少なく見積もって、地方からの来園者の5割が近隣に宿泊したと仮定しても、62万人（380万人×32.5%×50%）の宿泊需要が新たに発生したことになる。当然舞浜地区のホテルでは賄いきれず、都内や千葉県内への宿泊が増加した。実際に千葉県地区や幕張地区といったベイエリアのホテルでは、TDRグッズを手みやげに宿泊する家族連れやグループの姿が数多くみられ、「TDR効果で稼働率が上昇した」との声が複数のホテルから聞かれた。交通機関でも京葉線の始発である東京駅等では、早朝から連日TDR客で例年を上回るにぎわいを見せたほか、帰り列車でもTDRグッズやみやげ物袋を大量に抱えた家族連れとグループ客であふれていた。

現在の活況から、当面TDRの集客力に懸念材料はないように見受けられる。しかし同社では、現施設では入園者を受け入れるキャパシティが限界に近づいていること、中長期的には国内人口の減少により入園者数に陰りがでてくる可能性があることなどに問題意識を持っており、将来を見越して、近隣の事業用地の購入（13年12月、23,382㎡、今後の事業展開を展望しての取得とみられている）、海外ゲスト取り込みの強化（13年度は相当数の増加をみた模様）など、課題への対応を確実に進めている。また、ゲストサービスに特化した園内のコンシェルジュ的な役割を果たす「ドリームコンダクター」を新たに配置するなど、ソフト面の取り組みの強化も常に進めている。

集客力が高いだけでなく、恩恵を受ける取引先は数千社に上るとされており、周辺への経済効果は大きい。「TDR+幕張のイオンや木更津のアウトレットに行きたい」という外国人観光客も増えている。TDRが今後とも多くのゲストを集客し、引き続き様々な面で千葉県経済に貢献してくれることを期待したい。（弓野）

